

【書評：西成活裕著『渋滞学』】

国際地域専攻の小田桐奈美氏による書評は、これまで存在しなかった「渋滞」に関する学問について論じられたものであった。小田桐氏の視点は、人文・社会科学といういわゆる文系の学問になじんでいる立場から、（つまり聴衆も同様の立場にある。）理系の発想や視点といったものを積極的に吸収しようとする姿勢が見られ、IFERI という異分野融合の視点を踏まえた上での効果的なプレゼンテーションであったという印象をもった。

【研究発表】

今回の発表は「インド仏教思想史における無我説の変遷」という題目である。仏教が端を発したインドにおける無我説がメインテーマであった。それゆえ自明のことにみえる無我という概念には、他のインド思想との対立的関係があることと、無我説自体に思想的変遷があることを概観したのち、その上で発表者の中間評価論文の成果とそこから見えてきた今後の課題を紹介させていただいた。

発表内容は、①発表者の研究関心、②従来の無我説の説明及び現在までの研究状況、③中間評価論文の概略と今後の課題の三点に集約される。訳注研究が先行し、全体像の把握が立ち後れている仏教文献学の現状から、無我説というテーマを軸に時代や地域の枠を超えて、横断的に仏教思想を捉え直す試みが発表者の研究の意図である。

【質疑応答】

指定討論者として、国際政治経済学専攻の范丹氏から人・法・我といった仏教思想の主要用語に始まり、大乘仏教の位置づけや文献を対象とする点等、基本的かつ重要なご質問をいただいた。これらに対して、仏教思想における人間とその外側に存在する外界物（＝法）との区別は明確であるが、我（＝アートマン）という固有の性質の有無については無我とは別のカテゴリーであり、発表者としても今後の研究課題とするところである。また初期仏教以来の思想継承の上に、大乘仏教の時代に仏教思想が黎明期を迎えているという点や、仏教文献学という研究分野自体が、限られた文献資料を根拠にする点について言及した。

さらに同指定討論者として、国際地域専攻の小田桐奈美氏からは仏教徒における經典の意義について問われ、仏教徒にとって釈尊が説いたとされる阿含經典の重要性について言及する形となった。またイスラームとの相違を問われ、この点に関しては国際公共政策専攻の前田洋平氏から仏教思想が原理化しなかった理由について問われた。この質問に関しては、当該王朝において国家政策として仏教思想の保護があったことに言及したが、発表者も当時のインド社会における宗教のあり方に眼を向けることができ、大変刺激を受けるものであった。

最後にここには書ききれなかったが、至らぬ発表であったにも関わらず、実にさまざまな観点から、上記以外にも多くのご質問とご指摘を受けた。この場を借りて感謝の意を示したいと思う。